

茜色の歌姫



第四部 白村江の戦い



白村江の戦い想像図

春正月の丙申の朔庚申に、御船、還りて那大津に至る。(中略)五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神怒りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近

侍、病みて死れる者衆し。(中略) 秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。
〔『日本書紀』卷第二十六〕

齊明天皇代 額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

〔『万葉集』一卷〕

大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。(中略) 須臾之際に、官軍敗績ねぬ。水に赴きて溺れ死ぬ者衆し。

〔『日本書紀』卷二十七〕

第二章 蝦夷の春 660

波飛沫が船端を叩き、潮風が乙女の髪をなびかせた。

「母よ」

船縁に座し、十三歳の十市皇女は、赤く透き通った小さな玉を、掌で弄びつつ、言った。

「この琥珀は、津軽の蝦夷から母に献されたもの」

「然り」

並んで座した額田郎女は応えた。

「琥珀ばかりではない。津軽の市には、さらに北の渡島、あるいは唐や三韓より渡ってきた珍しい宝が数多く交易されている」

「大和のものは、よほど違うのか？」

眼を輝かせる十市皇女に、額田郎女は眼を細めて微笑んだ。

「ここに到るまでに、十市も見たであろう。越や秋田や淳代の人や物を」

「見た」

「蝦夷というが、それぞれ、住む場所で、着るものも食するものも使う器も異なる。言葉も違う」

十市皇女は立ち上がり、陸を見つめた。

当時の船は、船底が平らで、外洋の荒波を受ければ忽ち転覆する。陸地が見えなくなるまで沖合いに出るのは危険であった。

「蝦夷は、山の樹も違う」

十市はそう吹き、櫓を見上げた。

「將軍よ」

櫓の上には、大將軍の阿倍比羅夫が立っていた。皇女の声に、櫓を降りようとするより早く、十市皇女はするすると階梯を登った。

「あれは何ぞ」

指さす先に、樹の茂った小高い丘越しに、高い望楼が貌を覗かせていた。黒い衣を着た人らしきものが二、三、動いている。

「津軽の市に建てられた高樓」

阿倍比羅夫は、膝を突いて応えた。

「ここから見えるということは、かなり巨きな高樓ではないか」

「然り。飛鳥の寺の五重塔よりも高い」

「母よ！」

皇女は叫んだ。

「早く津軽を見たい」

市は、入り江の津より、幅七步（約13メートル）の平らに均された道を一町（約500メートル）

ばかり歩いた先にあつた。

津で、蝦夷の長どもの出迎えを受け、大將軍の阿倍比羅夫や豊璋王子が、迎賓のための館に入った後、十市皇女は待ちかねたように市に向かって走った。額田郎女は、女孺を二人随れて後を追った。

中央にそびえる巨大な高樓の周りに、高床の木組の蔵が並び、数百のひとびとが集って、交易を行っていた。土器、勾玉などの装飾品、干した魚や海藻、鉄や青銅の器具、漆を塗った器、獣皮、樹皮を干して糸となし編んだ袋や籠、さまざまな品が売り買いされている。

市からは、海面に浮かぶ大和の船団も望めたが、誰も気に留めない。津には、様々な地から船が来る。唐や三韓、さらにはいづくの地とも知れぬ様相の者も目に付く。

「母よ」

眼を輝かせ、十市皇女は叫んだ。

「ひとびとの服の紋様のおもしろさよ」

蝦夷のひとびとは、絹や麻ではなく、寒い時期には獣皮を、暖かい季節には樹皮の糸を織った服を好む。黒や濃い茶で染め、赤や黄などの鮮やかな色で三角や渦巻き状の線を連ねた、力強い意匠が目立った。

「市を見てくる」

よく動く瞳……。叫ぶなり駆けだした十市皇女に、額田郎女は微笑んだ。瞳が動くと同時に、軀が動いている。十市皇女は、並べられた土器の傍らに駆け寄って坐し、一つ一つを手にして言った。

「かような土器は初めて」

炎が燃え立つような縁取りの壺、人型を側面に並べた瓶、なかでも、刷毛で搔いたような紋様の土器を、十市皇女はつくづく眺めた。土器を売っていたのは、四十過ぎの女だった。唇の周りに青く入れ墨を施している。夫ある蝦夷女の習わしだが、十市皇女は言葉が通じぬのも構わず、土器を指さしたり、女の入れ墨に貌を寄せたり、さかんに唇を動かして喋っている。いつしか、蝦夷女も蝦夷の言葉で何かを言い、身振り手振りが混じり、互いの貌に笑みが浮かんだ。その姿にふと、額田郎女は、自らが乙女であったころ、あのように無邪気であったか……と思つた。

額田郎女と十市皇女の役目は、蝦夷のひとつとひととのさらなる睦み合いにある。確かに、十市皇女は適任であつた。忙しく市を駆け回り、身に着けていたものを蝦夷の品と交換し、やがて黒い樹皮の衣に、髪には翡翠の簪を刺し、すっかり蝦夷の乙女の体であつた。

「十市皇女は、万人の気を陽にしたまう」

気づくと、額田郎女の傍らに、阿倍比羅夫が立っていた。白いものの目立つ髭面の奥で、眼を細めて微笑んでいる。

「渡島へは何時？」

額田郎女は問うた。いつしか、比羅夫の兵どもも、市に入って品々を交換しあっていたが、交易に來たわけではない。

比羅夫は応えた。

「今日は兵を休ませ、明日、蝦夷の長どもと策を談じ合い、明後日には発つ」

「豊璋王子も供に？」

「否」

比羅夫は首を振った。百濟からの賓客を、戦場に伴い奉るわけにはゆかぬ。戦場、という言葉に、額田郎女は面差しを引き締めた。

なるべく、矛を交えることなく収めるつもりだが……、と比羅夫は呟き、やがて肅慎の者どもをこの地へ随れ来る故、その折りは、飛鳥の歌舞を披瀝されよ、と拝礼して去つた。

大將軍の背を見送りながら、ふと、十市皇女の姿が見えぬ事に気づいた。市の人の群に紛れたらしい。

とはいえ、聡い子、すぐに見つかるであろう。額田郎女は女孀どもを促し、歩き出した。

蝦夷の空は、飛鳥の空よりも高い。

十市皇女は、春の青空に浮かぶ雲を見つめて思った。眼を転じれば、いまだ雪をいただく山の尾根に囲まれ、足下の小川の水は冷たい。

いつしか、市を離れ、人影のない野に迷い込んでいた。丈の高い草を踏み歩きつつ、皇女の眼差しは、天に向けられていた。

あの雲のかたち……、蝦夷に來てから、よく見る。なぜ、あんな形をしているのだろうか？

口を半ば開け、十三歳になる十市皇女はひたすら歩いた。雲を追って歩くうちに、市を離れたことなど、すでに念頭になかった。皇女は、うつくしいもの、めずらしいもの、眼に映るさまざまなものに惹かれた。眼に映らず、耳に聞こえず、文字や言葉で表されるものは、ただ莫として

見当もつかなかった。十市の里から岡本宮に移ったとき、女孺どもが、哀れや父なる皇子の貌も拝めなくなつて……と囁き合つていたことを不思議に覚えている。しかし、父なる皇子とは、なんのこともなのか、皇女には分からない。何故に哀れなかも分からない。

ふと腰に眼をやつた。帯に、古い毬が提がつている。津軽の市でたびたび所望されたが、この毬だけは手放さなかった。

皇女は毬を手にし、宙に放り投げた。ふわりと浮いて落ちてきた毬を、爪先で蹴った。再び跳ね上がった毬は、皇女の折り曲げた膝に乗る。再び跳ね上げる。青い空にたかだかとあがつた毬を、今度は肩で受け止める。そう、蹴鞠。蹴鞠を教えてくれたのは、確かに父。優しいな面差しだったような気がする。

そういえば、岡本宮に移る前、姉なる人と、よく毬を蹴り合つた。ささら。そう、讚良と呼ばれたひと。もう一度、あの貌を見たい。とても、美しいひとだったから。

毬をたくみに蹴上げつつ、ふと見ると、草原がとぎれた。人の背丈ほどもある石柱が立っていた。その周囲を環状に石が敷き詰められている。

たしか淳代でも見た。丸く石を並べ、その中央に石柱を立てる。彼等の土産の神を祭る場だとか……。

背を丸め、左右の掌を石にあて、考え込む皇女は、草むらの陰から見つめる眼差しに気づかなかった。

肩先にそつと触れた指に、膝を突いて石に触れていた十市皇女は振り向いた。

眼の前に、蝦夷の男童が三人、屈み込むようにして皇女を取り巻いていた。年はいずれも十三か四か、髪を長く肩まで垂らし、眉は太く濃い。一人が、おずおずと伸ばした手を、宙に彷徨わせていた。

皇女がまず眼を留めたのは、端にいた男童が肩に掛けた袋であった。木の蔓で編んでいるが、袋の口を革紐で締め、そのあたりからさらに、肩に掛けるための紐が伸びている。飛鳥では見られぬ形状の袋であった。編み目から袋に詰めた草の実が透けて見えた。

「その袋は何ぞ」

皇女の問いに、男童どもは互いに貌を見合つた。蝦夷の服を着て、蝦夷の髪飾りをつけ、しかし貌立ちは蝦夷ではなく、発する言葉の意味は分からない。

ひととき背の高い男童が歩み寄つてきた。皇女の肩を掴み、何か叫んだ。皇女は首を傾げ、しかし笑みを絶やさず男童を見上げた。

気性の明朗な皇女は、人に嫌われたことがなかった。手荒に扱われたこともなかった。気難しい讚良皇女ですら、じきに馴染んだ。見知らぬ者ともすぐに睦む。険しい目つきで睨む蝦夷の男童どもも、皇女にはおそろしくはなかった。まるで鳥の鳴き声のよう……。皇女は、男童の発した蝦夷言葉に、そう感じただけであった。

不意に、男童は皇女の胸ぐらをつかんだ。ふくらみ始めた胸乳に拳を打ち当てられ、鋭い痛みが走った。

「放せ」

皇女は両手で、男童の手首をつかんだが、巖のように固い腕はびくとも動かない。ますます

力を込め、皇女の喉を締め上げる。

「放さぬと……」

怒りや恐怖は覚えなかった。かような際に如何にすべきか、皇女は心得ていた。

力を込め、膝を突き上げる。男童は、両手で股間を押さえ、紙のように地にへたりこんだ。二人の男童が駆け寄り、苦しげに俯いて呻く仲間を介抱しようとして、なす術を知らず、うるたえるばかりであった。

「冷やせ」

十市皇女は言った。

「川に身を浸して冷やせ」

指さす方に、雪解け水が冷たくせせらいでいた。

少しは楽になる。そう言つて踵を返して歩き出した皇女を、男童どもは傷ついた仲間の肩を抱き、追つた。

姿の見えなくなつた十市皇女を求め、女婦どもとあちこちを走り回つていた額田郎女は、市のはずれに出たとき、彼方の野より歩いてくる皇女の姿に、安堵の息をもらした。

皇女は独りではなかつた。三人の蝦夷の男童どもと、身振り手振りを交え、時にどつと笑い合つていた。

「母よ！」

郎女の姿に眼を留め、十市皇女は息を弾ませて駆け寄つてきた。

「いづくにいた」

緩んだ貌を引き締め、郎女は問うた。

「母よ、やはり蝦夷はおもしろい」

皇女は、母の厳しい面差しも気にせず、喋つた。

「この袋、吾が編んだ」

肩に提げていた袋を差し出した。

「サラニという。木の蔓で編む。丈夫で、風通しもよい。肩に提げられる故、疲れぬ」

「汝が編んだのか？」

「然り」

「いづくにて？」

「あの者どもの里にて」

振り返つた先に、不意に現れた大和の装束の郎女の姿に、おずおずと背を丸めている三人の蝦夷の男童がいた。皇女は袋に手を差し入れ、草の実を取りだした。

「藪である。この地ではコルコニと言うらしい。彼等の里に近い山で摘んだ」

「独りで、彼等の里に行ったのか？」

呆れて問う郎女に、十市皇女はつぶらな瞳で頷き、問うた。

「なあ、母よ。吾等は、しばらくここに留まるのか？」

阿倍比羅夫が、渡島の肅慎を鎮めるまでは、津軽に留まることになる、と郎女が言うと、
「ならば、吾は彼等の里で、寝起きしたい」

蝦夷の食物、蝦夷の衣、蝦夷の酒、その他、さまざまな事どもを彼等から習いたい、そう言い募る皇女に、郎女は、大將軍の赦しを得られれば、と苦笑しつつ頷くしかなかった。

二日後、阿倍比羅夫は船団を率い、渡島へと発った。

額田郎女は、豊璋王子とともに津軽に留まった。市には、異国の賓客の泊まる館があるが、十市皇女は望み通り、知り合った男童どもの里に寝泊まりすることとなった。三人の女孀と五人の兵が、皇女とともに、里に向かった。

皇女の宿は、里の長の館と定まったが、熱心に世話をしたのは、皇女に急所を蹴られた男童であった。

「ユポ」

男童は、自らを指してそう言い、皇女を指して、

「トウレシ」

と言った。それぞれ、兄、妹という意味であったが、十市皇女は分からぬまま、自らを「トウレシ」、男童を「ユポ」と嬉しげに呼んだ。

その間、豊璋王子は随臣とともに、津軽の各地を巡った。随臣には、医人や工人など、さまざまな技人がいた。蝦夷の地に、百済の優れた技術をもたらそうというのである。

十日ほどして、額田郎女は、豊璋王子の宿に招かれた。

「蝦夷の地は」

訳語を介して、王子は言った。

思ったよりも、技術が進んでいる。農はさかんではないが、自然の恵みは無駄なく活用している。さらに、唐や高句麗から様々な文物がもたらされてもいる。殊に、唐とのつながりは思いの外、深い。唐の皇帝に服属しているわけではなさそうだが……。

この時代、唐の皇帝は、世界の中心であった。大和をはじめ、三韓等の諸国は皇帝に朝貢し、そのかわり、柵封を受けてその保護下に入る。むろん、逆らえば討伐の対象となり、現に百済や、百済を支援する大和は、唐への朝貢を続けているとはいえ、何時、世界を支配する皇帝の巨大な矛が、向けられないとも限らない。

王子の懸念は、新羅に味方する唐が、蝦夷をして大和に軍を仕掛け、後方を攪乱することにあつた。

「されど」

王子は続けた。蝦夷には、蝦夷のすべての民を束ねる王がない。里と里との間に小さな諍いはあっても、大きな軍を経験していない。兵備と呼べそうなものもなく、軍を以て版図を拡張しようという考えもない。いま、百済の兵を差し向ければ、たやすく制圧できよう……。

眉を擡めた額田郎女に、豊璋王子は笑みを浮かべ、

「百済に、蝦夷を攻める余力はない」

と言った。言葉を変えれば、新羅や唐が、蝦夷を攻めれば、ひとたまりもなく彼等の掌中に入り、大和は巨大な敵を背に受けることになる。それを防ぐためにも、百済としても大和としても、より、蝦夷とは深く睦み合わねばならない、と王子は言った。そして、面差しを変えて威儀を正した。

「額田郎女は、飛鳥の渠の興事を通じて、大和の諸々の国の民を潤したと聞いた」
「誰よりそのようなことを？」

そう問う郎女に、王子は応えた。

「鏡郎女より聞いた」

郎女は、眼を伏せて応えた。

「民が潤ったとすれば、それは大王の威徳によるもの」

「されど、汝が献策によるものと……」

「吾はただの歌人、政事を動かす権はない」

「鏡郎女は」

王子はなおも言った。

汝を高く評価していた。汝の人柄を好もしく思い、汝が才を賞賛していた。

郎女は、眼を伏せたまま、幽かな微笑みを保った。鏡郎女が三韓の出であり、豊璋王子と浅からぬ関わりを持っている以上、王子が如何なる意図で郎女を呼んだのか、わかったものではない。額田郎女は、鏡郎女こそ敵と見定め、その力を矯めるべく動いてきた。王子に、心の裡を見せるわけにはゆかない。

額田郎女の意を見て取ったのかどうか、王子は声音を緩めた。

「百済は、度重なる新羅との戦に、邑々は荒れ、民は疲弊している」

百済の民を富ませる方策を知りたい。それ故、この度の出征に、額田郎女とともに随行することを、宝大王に申し出たのだ、と王子は、懇願するように郎女を見つめた。

「吾は大和の民」

額田郎女は俯いたまま言った。

「大和と百済では、風土が異なる故、百済の民の為になる策は想いも浮かばず」
「されど」

王子は食い下がった。大和といえど、諸々の国々は、おのおの風土が異なるはず。多くの地より集められた民を、うまく束ね、互いを交流させることで、それぞれの地を豊かにした。それは、額田郎女の献策によるところが大きいと聞いた。

重ねて問う豊璋王子に、額田郎女はこう応えた。

「各々の風土、習わしを尊ぶのみ」

王子は怪訝な面差しで問うた。国としての統一を保たねば、外敵への備えが弱まる。それ故、百済でも新羅でも、唐の律や令を取り入れ、大王の下す法の下に民をまとめようとしている。大和もまた、大王の御稜威をさらに高めるべく、法を整えていると聞いたが……。

「法は必ず要るもの、されど」

郎女は応えた。

「厳しき法や兵事にて民を統べるは霸道なり。大王の徳により、民に仁慈を施し、崇敬を受けることで国を統べるこそが王道。唐にては、王道こそ、あるべき政事とされていると聞いた」
王子は瞬きもせず額田郎女を見つめ、やがて口を開いた。

——あなたが何故、ヨ・フィ（麗姫）と敵対するのか、私には分からない……。

そう言い、大和の言葉に置き換えようとする訳語を手で押しとどめた。

「ユボ！」

猿のように高い樹の梢に登った男童を見上げ、十市皇女は氣遣わしげに叫んだ。巧みに枝を渡りつつ、男童は皇女を一瞥し、微笑んで再び貌を上げ、やがて木の葉の茂みに隠れた。

里に近い山に登った二人は、やがて伴の兵や女孀とはぐれ、しかし気にも留めず、さらに深く分け入り進んだ。蝦夷の樹は、飛鳥と異なり、木の葉が厚く大きい。日の光が滅多に射し込まず、昼でも黄昏時のように暗い。

やがて男童が、左手を懐に差し入れ、右手のみを使い、するすると幹を滑るように降りてきた。懐にした左手を出し、右手を添え、そつと皇女の貌近く寄せた。覗き込むと、包まれた二つの掌の中から、小さな動物が貌を出していた。

「これは？」

「ニウエオ」

嬉しそうに眼を細める皇女の面差しに、男童も微笑み、身振りを交えて語り始めた。すでに十日余を共に過ごすうちに、大和言葉と蝦夷言葉の混じった、二人のみに通じる言葉が出来上がっていた。

ニウエオとは、樹を渡る人、との意である。蝦夷の言葉は、人その他の動物を区別しない。たいていの動物は冬になると土に潜り、眠って春を待つが、ニウエオは眠らない。だから、秋の間に多くの食べ物を蓄え、木の洞などに隠す。ところが、隠した場所を忘れてしまうことも多く、リス、すなわち「忘れる人」という異名も持っている。

笑い転げる皇女に、男童はリスを手渡した。皇女は眼を細めてつくづくとリスを眺め、それから問うた。

巢は、樹の上にあるのか？

然り。母が、樹の洞で子を育てる。

このニウエオは、母か？

然り。

では、子のもとへ返さねば。

十市皇女は、そつとリスを樹の幹に乗せた。たちまち梢を這い上がり、茂みに消えた。その後を追って見上げる皇女の横貌を男童は見つめた。かすかに木漏れて差す日の光が、皇女の白い貌を金色に照らし出していた。

男童は、そつと口に出して呟いた。

「ク・エラマス……」

そう口にして貌を赤らめ、俯いて皇女に背を向けた。皇女には通じぬ言葉であるはずだった。だが、振り返ったとき、やや首を傾げ、眼を潤ませ、じつとこちらを見つめる皇女の眼差しに、男童はうろたえ、それからおずおずと右手を差し伸べ、皇女の肩にそつと置いた。皇女の頭がゆっくりと垂れ、男童の鎖骨のあたりに乗せられた。

「吾も……汝が好き」

十市皇女は生まれてはじめて恋を知り、そして、二人の間には何も起こらなかった。起こらな

かったのは男女の仲にはならなかったということであり、変わったのは、皇女をめぐるひとびと——ことに、蝦夷の里人であった。

はじめ、大和の大王家に連なりながら、分け隔てなく朗らかな笑みをもって接する十市皇女を、里人はみな、慕った。しかし、皇女の心が、一人の男童に注がれていることに気づいたとき、彼等の胸の裡はそれぞれに小波さざなみが立った。常に皇女に随い、日々の雑事を免れた男童への羨望。蝦夷の男童の心を奪った皇女への妬み。もはや若くはない里人は、いずれ来る別れの日に男童が抱くであろう悲しみを思つて溜息をついたが、若い里人どもが、先のことまで推し量はかることはない。それでも、里人たちは、胸の思いを外に現すことはなかった。ただ一人を除いては。

里の外れに小さな苦屋とまやがあつた。三十に近い男が独り、住んでいた。里の労働にも祭りにも加わることを許されず、苦屋から出ることも禁じられ、衣食を与えられ、ただ、活かされていた。男の貌の右側は、生まれたときから醜みにくくただれ、眼窩がんかの窪みはあつてもそこに眼球はなく、貌の真ん中に二つの穴が穿うたれるのみで鼻梁びりょうはなかつた。右の手には指が三つしかなかった。四肢が完まきものでなかつたが故、忌み嫌われ、遠ざけられていた。

男の苦屋に、久しぶりに光が指したのは、皇女が里へ来て五日目であつた。誰も近づこうとせぬその苦屋を、皇女は何気なしに覗いてみた。

朽ちかけた扉を開けた皇女は、背に日の光を浴び、暗がりになれた男の眼にまばゆく映つた。やがて光に眼が慣れると、皇女は微笑んでいた。生まれて初めて、男は己に向けられた笑みを見た。

その後、皇女が苦屋を訪れることはなかつた。男は、苦屋の隙間に貌を押しつけ、里を忙しく駆け回る皇女に眼を凝こらした。男の欲びは、やがて思慕へと変わった。そして、皇女の心がただ独りの男童に向けられたと知り、思慕は妬ねたみへ、そして憎悪へと変わった。やつと独り身を横たえるだけの苦屋の床で、男は懊惱し、煩悶した。異相とはいえ、彼も健やかな男児であり、身の裡には欲望が猛つていた。その欲望の矛先は、皇女に向けられた。皇女に向けて、狂おしく渦巻く欲望を放つたとき、棘のように総身を苛む憎悪から解き放たれるように思おもえた。

ある夜、眠れぬまま、男は苦屋の裡で仰臥ぎやうがしていた。

ふと、外で足音がした。夜、悪い精霊に満ちた外に出ることは戒いましめられている。

ユポ！

足音が停とまり、声が響いた。

疾はやう！

もうひとつの足音が、声のほうへゆっくりと進んでいった。

あの声は……。

男は跳ね起き、静かに戸を開け、外を見た。二つの影が、里の外へと歩いていった。その一つは、十市皇女に違いなかつた。

よいのか？

皇女と肩を並べて歩きつつ、男童はおずおずと問うた。

ユポは以前、このあたりでいちばん、美しい夜明けを見られる場があると言つたな。

言った。

吾は、汝と二人、夜明けを見たい。

十市皇女はそれきり口を噤み、足を速めた。

男童は不安げに振り返り、青い闇の中に遠ざかっていく己が里を見た。阿倍比羅夫が皇女につけた兵を伴わず、里を出ることは禁じられている。男童はそれを破った。皇女の頼みとはいえ、後でどんなことになるのか、おそろしかった。

二日前、男童は、父からこう諭された。皇女はいずれ、大和に還る。あまり睦まじうすると、別れが辛いぞ。

別れる日が来るなど、男童は思ってもいなかった。知ってはいても、考えたことはなかった。

いずれ別れる……。不意に胸の裡に焦りがこみ上げた。一度でいい、皇女と二人きり、時を過ぎたい。かつて山で、兵どもとはぐれた時のように。

男童の願いに気づいたわけでもなからうが、皇女は自ら、払暁前に二人で里を出、日輪を迎えよう、と言い出した。

そして二人は、闇のなかを進んでいく。その後を尾ける影に気づかぬまま。

夜明けとともに、里では十市皇女の姿が見えぬことに気づいた女孀どもが騒ぎ出し、兵どもは血相を変え、里人を捕まえては次々と、皇女を見なかつたかと質した。言葉がなかなか通じぬままいたずらに時は過ぎ、ついに里長の命によって、里の男どもはすべて、皇女の姿を求めて四方に散った。

津軽の津にいた額田郎女に報せが届いた時は、すでに日が沖天に昇っていた。十市皇女のこと、すぐに戻るであろう、と不安を押し隠して微笑みを作りつつ、すぐさま里に向かうべく身支度を整えていた郎女のもとに、皇女に付けた兵どもの長がやってきたのは、まさに津を出ようとしたときであった。

「皇女は、里に還られた」

額田郎女は安堵しつつ、しかし、俯いて告げる兵長の暗い面差しに、胸騒ぎを抑えて問うた。

「いづくにいたのか」

兵長はしばし黙し、やがて重い口を開いた。

「日が落ちる頃を見計らい、皇女を、疾うこの津に運び奉るよう、命じた」

「何故に、日が落ちる頃に？」

「人目を避けるために」

それ以上、どのように問うても、兵長は語ろうとはしなかった。

やがて黄昏時となり、四人の兵と四人の女孀がひとびとの眼から遮るように囲む板輿に乗せられ、十市皇女は運ばれてきた。板輿はすぐに、額田郎女が泊まる館に入り、堅く戸が閉ざされ、人の出入りが禁じられた。

誰に問えばいい……。

四肢の裡がすべて冷え、凍り付いたように身も心も動かなくなった。

目の前に、十市皇女が、胎児のように丸く身を曲げ、背を向けて臥している。何を問うても応

えず、触れようとすれば激しく拒む。

齡十三。男女の交わりを覚えてもおかしくはない年とはいえ、あまりにも酷すぎる破瓜であった。

医人が皇女の身を改めている間、郎女は心の動揺を必死で押さえ付けつつ、何があつたかを兵どもに問うた。皇女を発見した二人の兵は、眼を赤く腫らし、幾度もひれ伏して謝し、やがて口を開いた。

……里のそばに、小高い山がある。深い樹に覆われているが、その頂は、石を敷き詰め、中央に石柱が立っている。太古の民が、土産の神を祀った聖域で、民どもは年に一度しか足を踏み入れない。

兵の一人は、蝦夷の男童が皇女に、そこで拝む日の出の美しさを語るのを聞いていた。十市皇女が、その男童と共に消えたとき、もしやともう一人の兵を誘い、山に登った。

頂に着いたとき彼らが見たのは、石畳の上の仰向けに伏せ、着衣は引き裂かれ、鮮血にまみれた陰をさらし、虚ろに空を見つめる皇女の無惨な姿であつた。その傍らに、例の蝦夷の男童が、皇女に覆い被さるように膝を突いていた。

兵どもは皆、十市皇女を慕っていた。慕っていた皇女が、事もあろうに蝦夷の男童に姦された。

怒りよりも早く、兵どもは剣を抜き、男童に襲いかかった。幾度も剣が振り下ろされ、男童は血塗れの肉塊となつて絶命した……。

聞き終えた時、郎女は、四囲を闇に閉ざされ、五感はざらつき、脳裡は痺れ、唇を開いて命じることしかできなかつた。

このこと、誰にも言うな。

二人の兵を退がらせ、臥したまま黙す皇女と二人きりになった郎女は、そつと皇女の肩に手を置き、貌を覗き込んだ。

皇女は貌を背け、そつと、しかし力強く母の手を払いのけた。

「皇女……」

呻くように絞り出した声に、皇女は毫も応えなかつた。

「……皇女」

再び肩に手を置き、軽く揺すぶつた。皇女は絶叫し、己が身を両手で掻き抱き、敵から身を守る虫のように背を丸めた。

誰に問えばいい……。

明け方近く、やつと眠りに落ちた皇女の傍らに座しつつ、郎女は懊悩した。大海人皇子に会いたかつた。会つて、皇女の身に降りかかつた災厄を告げたかつた。皇女を独り、蝦夷の里に起居することを許した己を責めたかつた。皇女を姦した蝦夷の男童を大声で罵りたかつた。そこまで思い至つたとき、女孀がおおずとおおずと入ってきて、豊璋王子の来訪を告げた。

豊璋王子は、伴を外に待たせ、訳語も随れずに入ってきた。手に石盤を抱えていた。十市皇女が眠る部屋と壁を隔てた隣室に、額田郎女と対座した王子は、二人の間に石盤を据え、手にした蛸石で盤上に文字を書き付けた。

——十市皇女の身に何か？

文字はそう問うていた。郎女は、王子を一瞥し、こう書き添えた。

——皇女は傷を負い、休んでいる。

王子は凝つと郎女を見つめ、やがてこう書いた。

——皇女のいた里は、周りを柵で固め、武器を集め、夜じゅう篝火を焚いている。

郎女は、石盤の文字を見つめながら、貌を上げることができなかった。板輿に乗せられ、四方をものものしく固められて津軽に戻ってきた皇女に、不審を抱いたのである。豊璋王子は、自らの臣を派し、里の様子を探らせたい。王子が不審を抱いたとすれば、他の者もまた、怪しんだに違いない。とても隠しとおせるものではない。

貌を上げぬ郎女に、王子はまた、文字を連ねた。

——彼等は、何を恐れているのか？

他でもない。里の者が大王家の皇女を穢した。報復に攻め寄せてくるであろう大和の兵に備えているのだ。彼等の恐れは、やがて他の里へも広がる。

郎女は、改めてこの一件の持つ重さを覚えた。事は、十市皇女ただ独りの災厄ではない。ひとつ誤れば、大和と蝦夷との間柄をも危うくしかねない。自らの胸に納めて済ませることなど、かなうことではない。

——蝦夷の男童が、皇女を姦した。

蠟石を受け取って書き付け、郎女はすぐに袖で石盤を拭い、文字を消した。豊璋王子が、貌を強張らせ、息を呑む気配を感じた。その眼差しが注がれているのを知りつつ、郎女は見返すことができなかった。皇女が穢されたことを明かせば、己が身をも穢れたように映るように、何故か

そう感ぜられた。

俯き、肩をかすかに震わせる郎女を見つめていた王子は、しばし黙し、やがて石盤に書き付けた。

——大將軍には報せたのか？

郎女は貌を上げた。蝦夷における大和の軍の差配は、大王から大権を委ねられた大將軍に一任されている。大王家に連なる者であっても、大將軍の命には逆らえない。まず、なすべきは、渡島なる阿倍比羅夫に事の次第を報せ、指示を仰ぐことであろう。

——夜が明ければ、すぐに使者を渡島に送る。

郎女の文字に、王子は深くうなずき、こう書き添えた。

——吾が配下に、蝦夷の様子を探らせる。何かあれば、すぐに報せる。なるべく、皇女の側におられよ。

口は噤んだままだが、王子の眼に暖かいたわりを覚え、郎女は不意にこみあげた涙を、ついに抑えかね、雫が次々と石盤に落ち、連ねられた文字を滲ませた。

「責められるべきは……吾」

郎女は口に出して言った。

「皇女を独り、里にやるのではなかった。この地に置いていけば、かような事にはならなかった」
涙で声は呻きに近かった。王子は氣遣わしげに言った。

「額田郎女……」

「吾は……何もできなかった。皇女を助けてやれなかった。皇女は、吾が手を触れるのも拒む。

声をかけても応えぬ……」

郎女の両手が伸び、石盤を越え、王子の袖を掴んだ。きつく掴み、揺すぶった。

「如何すればいい……どうすれば……」

あまりにも脆い……。土蜘蛛として武を鍛え上げ、大王の側近くあつて政事を動かし、しかし、ただ独りの娘を酷い災厄から守ることもできず、その傷を癒すことすらできなかった。三輪の箸墓なる土蜘蛛の里に集められた乙女たちには、無理強いに姦された者もいた。姦されながら、穢れた者として生まれ里に住めなくなつた者も多かった。彼女らが、心に醜く刻まれた傷を癒すのに、どれだけの苦しみを味わつたかを、郎女は知っていた。あの朗らかな笑みが、十市皇女の貌に浮かぶのは、いつになるだろう。

次々とこみあげる思いを、額田郎女は声に出して吐き出し、異国の王子にぶつけた。堅く袖を掴んで離さず、慟哭し、口について出る言葉は絶えなかった。

いつしか、二人を隔てていた石盤は隅にやられ、郎女は王子の懷に貌を埋めていた。苦しみを受け止めてくれる男を、彼女は欲していた。男はすぐ、眼の前にいた。袖を掴んだ両手を、王子の背に回し、掻き抱いた。躊躇いがちに、王子は郎女の両腕に手を添えた。郎女は、いっそう強く王子を抱き、王子はそれに応えた。

使者が渡島の阿倍比羅夫のもとへ向かつて後、郎女は十市皇女の側を離れまい、と心に決めた。経緯を知る僅かな女婦と医人より外の者の出入りを許さなかった。

二日たち、三日がたった。使者は未だ戻らず、十市皇女の様子も変わらなかった。変わらぬこ

とが、郎女の心を苛み続けた。その苦しみに耐えられず、四日目の夜、皇女が寝入った後を見計らい、自ら豊璋王子の寢屋に忍んだ。王子とまぐわう時だけ、郎女はすべてを忘れられた。

豊璋王子は、どこか大海人皇子に似ていた。何も言わず、ただ、郎女の苦しみを、郎女が望むとおりに、受け止めた。忘我の境地に浸ろうと、常にもなく激しく身を動かす郎女に、王子は寛やかに応え、さらなる快を与えた。

王子の寢屋から戻り、褥に臥して眠る十市皇女の貌を見つめる。眼を閉じ、眉や唇が無防備に開き、稚く朗らかだつた頃と同じ面差しであった。その面差しが、またも郎女の心を責め苛んだ。

やがて郎女は、時折、皇女の眼が、憎しみとも蔑みともつかぬ色を浮かべ、母を見つめていることに気づいた。気づいて見やれば、皇女は眼を逸らし、褥に貌を埋める。郎女は狼狽えた。もしや、豊璋王子との情交に気づいているのだろうか、と思ひ至り、総身が冷えた。

ひたすら、阿倍比羅夫に送つた使者の帰還が待ち遠しかった。

比羅夫が津軽に戻ってきたのは、使者を送つてから十日目であった。すでに、肅慎の殆どは降つた。軍の差配を部下に任せ、比羅夫は目立たぬように僅かな兵をつれ、一艘の船で海を渡つた。

額田郎女の室に通された比羅夫は、郎女と並んで豊璋王子が座しているのに、かすかに眉根を顰めた。大王家の皇女が蝦夷に穢された。異国の王子に知られてよいことではない。

拝跪して座した比羅夫に、郎女は俯きつつ、訥々とこれまでの経緯をうち明けた。時に涙ぐみ、

苦しげに口を噤み、その都度、氣遣わしげに郎女をいたわる王子と、それに応える郎女の眼差しに、ただならぬ氣配を覚えた比羅夫は、しかし、それ以上、詮索はしなかつた。

大将軍としてひたすら大王家に仕え、余事に容喙しない。それが、打ち続く抗争のただ中であつた飛鳥で生き抜いてきた、比羅夫なりの智慧であつた。

比羅夫は、ただ一つの懸念を口にした。

「この度の件、蝦夷どもの様子は如何なるか」

問われて郎女の眼は、心細げに豊璋王子に注がれ、比羅夫は沸き上がる苦々しい思いを押さえて付けた。大王家の皇女の母なる人が、百済の王子に頼り切っている……。

郎女が、傍らに置いた石盤に蠟石で比羅夫の問いを書き、王子がそれに応えて文字を書いた。

郎女が、その文字を読み上げる。

——津軽の蝦夷はまだ穏やかなるが、皇女を穢した男童の住んでいた里は、依然、柵をめぐらし、警戒を解いていない。

「如何すべきであろう」

すがるように膝を進める郎女に、比羅夫は痛ましさを覚えた。些かも傲然たる氣配を見せず、常に控えめに振る舞いながら、己の力と知を信じ、頼もしげであつた郎女は、いまや萎れた花のように映つた。

比羅夫はしばし黙した。事は、大和の大王家の御稜威に関わることであつた。蝦夷に穢された御稜威を、いかに雪ぐか、臣たる比羅夫が決めることではない。いま、この地で決められる者がいるとすれば、皇女の母である額田郎女独りであつた。

「豊璋王子よ」

比羅夫は、百済の王子に向かい、拝礼して問うた。

「百済王家ならば、斯様な際に如何される」

王子は郎女と比羅夫の貌を見比べ、やがて蠟石を手にして石盤に書いた。盤上に連ねられる文字を見つめていた郎女の貌が、青ざめた。

書き終えて、王子は石盤を阿倍比羅夫の前に置いた。比羅夫は覗き込み、僅かに唇を引き締めた。

こう書かれていた。

——王家に連なる者を害するは大逆の罪。罪は九族に及び、彼等の里は焼かれ、里人は塵されるであろう。

塵とは、悉く殺す、の意である。

郎女は、唇を震わせながら、豊璋王子を見た。眼差しを伏せ、なんの感情も表にせず、静かに座している王子に背筋が冷えた。

「それぞ」

郎女は叫んだ。

「皇女を穢した蝦夷の男童は、すでに兵が誅した」

叫んで、こちらに向けられた王子の眼差しに、郎女は急ぎ、石盤に字で書き表した。王子は不思議そうに郎女を見つめた。一人の皇女に向けられた逆意は、ただ一人の蝦夷の命であがなえる

ものなのか。

郎女は、王子の面差しから、その意を汲み取った。郎女は、皇女を穢した蝦夷に報復することよりも、皇女の受けた恥を、なるべく知られぬようにすることを希んでいた。大がかりに兵を動かし、かの里を攻めるとなれば、事は広く知られることになろう。それでは、皇女があまりに哀れであった。遠い蝦夷の地で、賤しい男童に穢された、その烙印を押されたまま、長い後半生を生きねばならないのだから。

とはいえ、すでに少なからぬ者が、何が起こったかを知っている。やがて広まる以上、大王家の御稜威のためにも、蝦夷はさらに報いを受けるべきではないか、という豊璋王子の言も、十分に理がある。

「やがて、慎粛は鎮まる」

比羅夫が静かに口を開いた。

「故に、軍を渡島からこの地に戻し、かの里を攻めるは易いこと」

豊璋王子と比羅夫の眼差しが、郎女に注がれていた。断を下すのは郎女しかないと、双の眼は訴えていた。郎女は、四圍の壁がこちらに向かって迫ってくるような思いに捕らわれた。

しばし、誰も口をきかなかった。

不意に、戸の向こうで足音が響いた。大きな音を立て、戸が開かれた。

十市皇女が立っていた。

「皇女よ」

額田郎女は驚き、皇女の傍らに膝を進めた。

「何故ここに……」

十市皇女は応えず、ただ、郎女を見下ろした。面差しは堅く強張り、眼は冷たく、なんの感情も浮かんではいなかった。郎女は怯んだ。さらに、その眼差しは、冷たく凍ったまま、豊璋王子に向けられた。

やはり知っていた……。

郎女は、床が崩れ、暗い奈落へと落ちていくように感じた。

「大將軍よ」

十市皇女は、当惑げに拝礼する阿倍比羅夫に歩み寄り、片膝をたてて座した。

「蝦夷の男童を討った二人の兵は、いまだ津軽の地にありや」

「然り」

うなづく比羅夫に、皇女は静かに続けた。

「彼等を、斬れ」

「皇女よ！」

郎女は叫んだ。

「何故に二人の兵を……」

彼等は、皇女を穢した蝦夷の男童を討った。罰せられる筈は何もない。

「大將軍よ」

十市皇女は、母を一瞥もせず、言った。

「彼等は、吾が夫となるべき人を殺した。彼等は罰せられるべきである」

「汝が夫？」

郎女の問いに、皇女は応えず、まなじり 毗を引き締めて比羅夫を見据えた。

「……必ず、斬れ」

そう言い、立ち上がり、踵を返し、戸に向かって歩き出した。

「皇女よ」

郎女は、皇女に追いつき、その腕を掴んだ。十市皇女は立ち止まり、物憂げに貌を背けた。

「かの討たれた男童は……では……」

まさか……、皇女は無理強いではなく、ただ、恋した男童と睦み、交わっただけなのか。それを、二人の兵どもが見誤り、男童を殺してしまったのか。

皇女の眼前で。

「皇女よ、何が起こったのか、ありのままに話せ！」

郎女は叫んだ。皇女は、郎女を見ぬまま、肘を押しして掴んだ手を振り払い、室を出ていった。

戸の外で待っていた女孀どもを押ししのけ、十市皇女は独り己が室に戻り、床にうつ臥せに倒れた。

ありのままに話せ。

母はそう言った。ありのまま。あの払暁に起こった忌まわしい一件が、皇女の脳裡に蘇り、振り払おうと双の手で頭を抱え、幾度も額を床に打ち付けた。

あのととき……。

山の頂から、津軽の海と陸と空が一望された。蝦夷の大地から、二つの腕が伸びるように半島が海に突き出し、左右の腕に抱かれるように穏やかな湾内に、大小の船が浮かんでいた。さらに広がる海原は、やがて東より昇る日輪に照らし出される、その一瞬の美しさを、男童は雄弁に述べ立てた。眼を輝かせて口を動かすその横貌を、皇女は見つめていた。こみ上げる胸の思いを吐き出すように、両手で男童の軀を掻き抱き、唇を胸に押しつけ、つぶやいた。

好き……。

男童は口を噤み、やがて静かに皇女を押し戻した。

何故？

悲しげに首を傾げて皇女は問うた。吾に抱かれるのは、嫌か。

男童は首を振った。しばし俯き、声を絞り出した。

「トウレシ……」

妹よ。汝はいずれ、飛鳥へ還る。

その一言に、皇女の総身は強張った。いずれ還る。蝦夷の地を離れる。思ってもいなかった。先の事を考える癖のない稚ない皇女は、いずれ「先」がやってくるという時の流れの酷さに、慄然とした。

「ユポ……」

皇女は笑みを作り、男童の手を握った。兄よ、では、汝も吾と共に、飛鳥へゆこう。

男童は驚き、首を振った。彼は、生まれた里を出ることがない。この里で育ち、この里で妻を

得、この里に子を遺し、死ぬ。それが、男童が思い描く己が生であり、その外に出ることは、余りに恐ろしく、禍々しい。

皇女の眼から涙があふれた。生まれてより、希んで叶わぬ思いを味わったことなかった皇女に、男童の切ない拒絶は、あまりにも酷く思えた。

「ユポ、嫌い！」

皇女は叫んだ。

「トウレシ……」

「嫌い……里へ還れ！」

皇女の激しい叫びに、男童は随った。男童の悲しげな足音が遠ざかるにつれ、皇女は悔いた。悔いて動けなかった。後を追うこともできなかった。何もできぬまま、皇女はひたすら啜り泣いた。

ふと、傍らでがざりと草が鳴った。貌を覆っていた両手を離した。涙でぼやけた皇女の眼に、むき出しの男の臍が臍に映った。

「ユポ？」

戻ってきたのか。貌を上げると同時に、頭をしたたかに打たれ、皇女は仰向けに倒れた。薄れゆく意識のなかで、皇女は、何者かが己が軀に覆い被さるのを感じた。

暗闇に沈んだ意識を現実に戻したのは、さらなる激痛であった。堅い皇女の陰に何かが押し入り、皇女の身を二つに裂いた。

あまりの痛みに眼を開いた先に、貌があった。右の半ばが醜く爛れ、眼球も鼻梁もなく、小さな穴が二つ穿たれたのみの異相が。苦痛に抗い、身を起こそうとして、またも貌を殴打された。覆い被さった見知らぬ男が、軀を前後に動かし、皇女の陰の裡に新たな痛みが走った。

皇女は総身をのけぞらせた。頭頂を地につけ、顎が天に向けられた。見開かれた二つの眼に、天地が逆さまに映った。海と空が入れ替わり、その切れ目から貌を覗かせた日輪が、まばゆい光を四方に放ち、皇女の眼を射抜いた。視界は赤く閉ざされ、底なしの泥濘に沈んだかのように身動きできぬまま、皇女は姦された。

やがて男童が戻ってきた。独り皇女を山に置いて去るべきではないと引き返してきた男童の眼に、痛みと屈辱に、仰向けに赤く染まった陰をさらしたまま、惚けたように天を見つめて動かない皇女の姿があった。男童は恐る恐る皇女に歩み寄り、貌を歪めた。

「トウレシ……」

そのとき、二つの足音が荒々しく駆け寄った。剣が、日の光を受けて閃き、男童は血を噴いて倒れた……。

「いずれにせよ、かの男童は……」

重い静けさを破るように、阿倍比羅夫が口を開いた。

「罪なくして斬られた」

苦しげに床に両手を突き、肩で喘いでいた郎女は、貌をあげて比羅夫を見た。

「大將軍よ」

不意に郎女は立ち上がり、問うた。

「誰か、蝦夷の言葉を話せ、心きいた者はおらぬか」

「さて……」

不審げに見上げる比羅夫に、郎女は言った。

「今宵、吾はその者と二人、かの里へゆく」

「二人で？」

比羅夫は反対した。兵器を手にし、里じゆうが殺気だっているであろう最中に、ただ二人でゆけばどうなるか。万が一のことがあれば、里一つ焼くだけではすむまい。大がかりに軍を動かさざるを得なくなる。

「否」

郎女は片膝を折って坐し、静かな声音で言った。

「多くの兵を伴えば、かえって蝦夷の者どもにあらぬ疑いを抱かせよう。ただ二人とあれば、彼等も手出しはできない」

「されば」

比羅夫は問うた。

「里へ行き、如何される？」

「かの男童を誅する」

誅とは、死者に祈りを捧げ、魂を鎮めることを言う。

見誤りとはいえ、罪なき蝦夷の童を殺した。まずは、蝦夷の者どもの心を安んじねばならない。

皇女の母である吾が、死んだ男童を誅すれば、彼等も安んじて武備を解こう。その上で、皇女の身に何が起こったかを探るべきである。

皇女は語らず、兵どもも見えていない。蝦夷の助力が要る。そのためにもまず、彼等を宥めねばならぬ。

阿倍比羅夫は押し黙った。もはや郎女は、萎れた花ではなかった。

静かにやりとりを見守る豊璋王子の眼差しに気づいた比羅夫は、郎女の案を石盤に書いた。王子は微笑んだ。

——良策である。

王子はそう、盤上に書き付けた。額田郎女が、かつて土蜘蛛として鏡郎女に仕えていたことを、王子は知っていた。

その日の黄昏時。

額田郎女は、阿倍比羅夫が選んだ伴を一人随れ、闇が覆い始めた道を急いでいた。

阿倍越麻呂は、比羅夫の一族、いまだ二十半ば。昨年の蝦夷への遠征に加わり、そのまま津軽に留まっていた。蝦夷の言葉にも風土にも詳しい。

若い越麻呂はまず、額田郎女の異装に驚いた。髪をきつく結い上げて後頭部にまとめ、黒い衣に、黒い袴。腰に短剣を帯びている。

「その装束にて？」

思わず問うた越麻呂に、郎女は微笑み、背に提げた麻の袋の包みを見せた。常の装束が入って

いる、という。

やがて進むほどに、里の明かりが見えてきた。木陰に隠れて窺えば、柵を高くめぐらして篝火を焚き、幾たりか、弓を構えた里人が強張った面持ちで立っている。

「蝦夷の弓は」

郎女は、傍らの越麻呂に囁いた。

「どれほど飛ぶ」

「せいぜい一町（約90メートル）」

越麻呂は応えた。

「されど鏃には毒が塗ってある。当たれば、死にはせぬが、半日は動けなくなる」

「彼等の剣は？」

「青銅か石。狩りの獲物を割く刀にて、恐れるに足らず」

越麻呂の応えを聞きつつ、郎女は凝つと、里から眼を離さなかった。瞬きもせず見つめ、や

がて言った。

「しばし、ここにて待て」

言うなり、郎女の姿は闇の中に消えた。取り残された越麻呂が、心細く待つ裡に、やがて郎女は戻ってきた。息ひとつ乱さず、木の幹に背をもたせかけ、眼を閉じた。

こちらを見入る越麻呂の気配に臉を開け、郎女は言った。

「眠れ。夜明けまで間がある」

なおも眼差しを離さない越麻呂に、郎女は唇のみを動かして言った。

「里の裡を探ってきた。哀れや、ここ十数日、吾等を恐れ、軍に備えていたのである。みんな疲れている」

越麻呂は驚き、息を呑んだ。あの厳しい備えを如何にくぐって里に入ったのか。外から見る限り、里にはなんの動きもない。

「弓弦を緩めておいた。彼等が吾等を害そうとしても、なんとか逃げ延びられよう」

郎女はこう付け加え、寝よ、と若い越麻呂を促した。

東の空に日が昇り、朝露を含んだ草の匂いに眼を覚ました越麻呂は、すでに白い衣に薄緑の裳、紅の帯を締め、巫女のように髪を垂らし、小さな鏡を木の根に置いて化粧する郎女の姿に、身を起こして拝礼した。

「行こう」

郎女は微笑み、唇に紅を塗りおえ、立ち上がった。

木陰を出て、ゆつくりと柵へと近づく。柵の裡がにわかに慌ただしくなった。

やがて、こちらに鏃を向けて弓を引き絞る男どもの、寝ずの番に疲れ煤けた貌が、くつきりと見えてきた。

柵から一町離れたところで、郎女は歩みを止めた。弓を構える男ども数は倍に増えていた。越麻呂はそつと郎女を伺った。郎女は、静かな面持ちで、唇を軽く閉じている。この距離ならば、矢は届くまい。もともと射程距離は一町。しかも昨夜、弓弦を緩めてきたという。それにしても、この穏やかさはなんだろう。

やがて郎女は、ゆつくりを貌を動かした。

その眼差しは、弓を構える男どもの一人ひとりを目念に追っていた。敵意をむき出しにした貌。軍に怯える貌。おのおのの思いを受け止めるように、郎女はまっすぐ、彼等の眼を覗き込んだ。すべての男どもは、いつしか、手にした弓ではなく、郎女の眼差しに気をとられていた。

郎女は、傍らの越麻呂の袖を引いた。越麻呂は、あらかじめ定められたとおり、蝦夷の言葉で叫んだ。

——十市皇女の母なる額田郎女が、罪なくして斬られた男童を誅しに來た。柵を開けよ！

翌日の夜。津輕に戻った越麻呂は、一族の者や兵どもにも高ぶって述べ立てた。

……柵の戸が開き、額田郎女は躊躇うことなく、里へと入った。気がつけば、数十の男どもが弓や剣を構え、吾等を囲んでいた。郎女は、静かに、くだんの男童の埋められた塚の在処を問うた。塚に案内され、郎女はその場に臥し、誅を述べた。涙を浮かべ、白い衣を土で汚すのもかまわず、誅を続けた。

その姿に蝦夷の者どもも心打たれ、ともに涙を流し、祈りを捧げ始めた。

額田郎女は、天性、人の心を得る術を知っている。その夜、里で宴が開かれた。吾等は饗応を受け、その夜は里長の家に泊まった。里の長は、皇女を害しようとした者の探索に、助力すると申し出た。

ただ独りで、郎女は、吾等と蝦夷との諍いの芽を摘んだのだ。なるほど、大將軍がこの度の北征に、郎女を伴われたのも領ける……。

その頃、額田郎女は、十市皇女の臥す褥の傍らに、独り坐していた。

皇女は、相変わらず母に背を向けていた。

「皇女よ」

郎女は、静かに言った。

「汝を姦した蝦夷は、吾が討った」

皇女の肩がかすかに動いた。それだけであった。

人を殺めたのは幾歳ぶりか……。

身を固くして動かない皇女の傍らで、郎女は物憂く、昨夜のことを思い出していた。

……誅を終えた郎女は、男童の家を訪なった。母が独り、幼い妹が二人。男童は、この家では独りの男手であった。

郎女は、静かに男童の母と向かい合った。俯き、時に涙ぐみ、歌うような蝦夷の言葉で男童のことを物語る母に耳を傾けた。十市皇女が、如何に男童を慕っていたかを知り、涙した。

日が落ち、宴が開かれた。郎女自ら、蝦夷の装束を着け、舞った。宴が果てた後、里長の家で臥所を与えられ、褥に入ってから後、郎女は眠れずにいた。

諍いは、ひとまずは鎮めた。しかし、十市皇女の心に醜く刻まれた傷は、なかなか癒えないだろう。しかも皇女は、自らが穢された直後、それを知りながら、母なる郎女が百済の王子とまぐわったことを知っている。

郎女は、密かに家を抜け出した。里を囲む柵はそのままであったが、見張りの姿はなかった。

見上げれば、鮮やかな星の群が、高い夜空に瞬いている。

郎女は、里を出て、ひたすら歩いた。やがてせせらぎが聞こえてきた。川の畔で郎女は、膝を折り、両手で貌を覆い、啜り泣いた。嗚咽は流れる水の音にかき消され、さらに、忍び寄ってきた足音も、郎女の耳には入らなかつた。気配に貌を上げたとき、すでにその男は、郎女の傍らに立っていた。

郎女はさつと後ずさりし、懐に忍ばせた短剣に手を置いた。

着い月影に照らされた男の貌は、右の半ばが爛れ、右の眼も鼻梁もなかつた。昼間、里のはずれの苦屋の戸から、同じ貌が覗いていたのを、郎女は思い出していた。

「里の者か？」

郎女は問うた。

「何故に、随いてきた」

男の唇が醜く歪んだ。右の手が股間に延びた。見れば、下半身には何も着けず、堅く屹立する陽物が晒されていた。

男の左の腕が伸びた。指さす先に、黒々と闇の中に静まる丘があつた。

十市皇女が姦された、あの丘であつた。

貌を強張らせる郎女に、男はなおも丘を指し、ついで己を指し、腰を動かして陽物を突き出した。その仕草を幾度も繰り返した。

「汝が……」

郎女の貌が歪み、絞り出された嗚れ声に、男はますます、唇を大きく広げて笑み、うなずいた。

「十市皇女を……」

そう口にするやいなや、郎女の右手が髪に伸びた。蝦夷の里人から与えられた龜甲の簪が引き抜かれ、素早く放たれた。

男の軀が硬直した。簪は、男のふぐりを一つ、深々と射抜いていた。

激痛に呻くことも出来ず膝を突いた男に歩み寄り、頭髪を掴んで仰向けに倒した。左足で胸板を押さえ付け、ふぐりに刺さつた簪を引き抜いた。右足の踵をそこに載せ、一息に踏み砕いた。

男は血反吐をはき、両手で股間を押さえ、総身をのけぞらせて痙攣した。郎女は、冷たい眼差いで、悶え苦しむ男を見下ろした。去勢され、断末魔の呻きを漏らし、股間から盛んに血が噴き出している。

ゆつくりとした死が、男を掴んでいた。すぐに息の根を止めてやる慈悲すら、額田郎女の心には浮かんでこなかつた。

百済に、唐と新羅の大軍が攻め入つたという報せが伝えられたのは、その年の夏が終わり、秋になろうとする頃であつた。